

メイベル・トッドの見た百年前の枝幸

高島孝宗¹⁾・山浦 清²⁾

¹⁾ 枝幸町教育委員会・²⁾ 立教大学

はじめに

メイベル・ルーミス・トッド (TODD, Mabel Loomis, 写真1.) は、1856年11月10日、アメリカのマサチューセッツ州東部の都市、ケンブリッジに生まれた。数学者で天文学者のイベン・ジェンクスとメアリ・ウィルダー・ルーミスの一人娘である(日塔編, 1967)。

彼女は1870年代にワシントンD.C.にあるジョージタウンの女学院で学び、その後、ボストンにあるニューイングランド音楽学校でピアノと声楽のレッスンを受けた。また、この頃、植物のスケッチを独学で身につけたとされる(J.D.エバウエイ編, 2007)。1879年、彼女は将来を嘱望されていた若手天文学者、デヴィッド・トッド (TODD, David Peck) と結婚し、翌年には一人娘のミリセントを授かっている。天文観測のために世界中を旅する夫、デヴィッドに付き従い、メイベルが枝幸を訪れたのは1896年(明治29年)の夏のことであった。このとき既に彼女は、詩人エミリー・ディキンソンの遺稿を詩集として世に送るなど、精力的な文筆活動を続けており、著述家として知られていた。

枝幸での日食観測記録は、1898年に旅行記『コロナとコロネット』(原題 Corona and Coronet)として発表された。本稿はこの本の中で枝幸村での見聞をまとめた(CHAPTER 28 ESASHI IN KITAMI)を訳出し、当時の社会的背景について考察を加えたものである。

明治29年の枝幸村の日食観測については『枝幸

町史』(上巻)(日塔編前掲)をはじめとして詳細な記録が残されているが、メイベル・トッドの記録は、当時オホーツク海岸の一漁村に過ぎない枝幸村の状況を、外国人の目から記録した貴重な資料である。また、枝幸町は昭和15年5月11日に発生した「枝幸大火」によって明治期の文書の多くを失っており、メイベル・トッドの書き残した知見は、当時の状況を伝える数少ない記録である。

なお、翻訳にあたっては高島が中心に行い、山浦が監修した。また、枝幸町教育委員会外国語指導助手として勤務経験のあるジョナサン・ブル氏(北海道大学大学院法学研究科法学政治学専攻博士課程)に多くの助言をいただいた。

『コロナとコロネット』について

『コロナとコロネット』(原題 Corona and Coronet: being a narrative of the Amherst eclipse expedition to Japan, in Mr. James's schooner-yacht Coronet, to observe the sun's total obscuration, 9th August, 1896)は、1896年8月9日の枝幸村での日食観測を中心に、日本での出来事や旅の記録をまとめたものである(写真2.)。

表題の「コロナ」は、日食の際に太陽の周りで観測される高温の光であり、「コロネット」(宝冠)は彼女たちがアメリカから乗船してきたヨット「コロネット号」の名に由来する。

原書は日食観測から間もない1898年にニュー



写真1. M. L. トッド

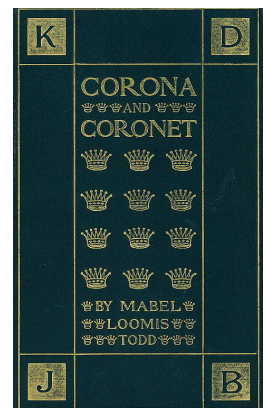


写真2. 原書表紙

ヨークの Houghton, Mifflin and company から出版されている。序文をのぞいて、本文は33章から構成されており、前半はアメリカを出発し、ハワイを経由して日本に着くまでの旅行記、さらに日本に到着してからの出来事が綴られている。枝幸村での記録は後半の第28章「北見の国、枝幸」と第29章「アイヌの土地で」が中心となっており、終章ではアメリカへの帰国の途につく状況が描かれている。375頁に及ぶこの本には多数の写真、挿図が付されているのが特徴であり、その数は34葉に及ぶ。本稿においても枝幸村に関するものを再録して紹介する。

D. P. トッドの日食観測

メイベルの夫、デヴィッド・トッド(写真3.)は、1855年にニューヨークに生まれた。1875年のアマースト大学卒業後は、アメリカ金星通過委員会助手を振り出しに、アメリカ海軍天文台テキサス日食観測隊主任、アメリカ編歴局副主任を経て、1881年には母校アマースト大学の天文学・航海学教授に迎えられている。デヴィッドは気鋭の天文学者として世界各地で日食観測に着手、1887年には日本の福島県白河で皆既日食の観測を試みている。この観測旅行には妻のメイベルも帯同しているので、枝幸での観測旅行は、夫妻にとって二度目の来日と言うことになる(日塔編前掲)。



写真3. D. P. トッド

1896年の枝幸での観測後は、1900年に北アフリカのトリポリ、1901年にオランダ領東インド、1905年再びトリポリ、1914年ロシア、1918年フロリダ、1919年南アメリカと、文字通り世界を股にかけて観測に従事し、その業績は世界の天文学界から高く評価されている。

枝幸での日食観測にかかる諸費用は、アマースト大学の卒業生で富豪の鉱山事業者、ジェームスが提供したもので、トッド夫妻以下のアマースト大学観測隊が移動に使用したヨット「コロネット号」も彼の所有する船である。

トッド隊は、コロネット号に観測機材や書籍

を満載し、西海岸サンフランシスコを出港した。

日本到着から枝幸村までの旅程

トッド隊はトッド夫妻を中心に計7名の態勢で観測に臨んでいる。ヨット「コロネット号」で日本に到着した一行は、その後メイベルだけが別行動をとった。メイベル以外の観測隊はコロネット号で横浜へ向かい、その後、青森まで鉄路を使って北海道に向かったようだ。

本稿では、『枝幸町史』(上巻)に再録されている、当時名古屋中学校教諭で観測隊の補助にあたった村上春太郎の手記から、日本到着後のメイベルの旅程について再現した。

1896年7月中旬

メイベル、京都で村上春太郎と落ち合う。奈良見物の後、神戸港より西京丸に乗り込み横浜に向かう。

7月27日朝

大連丸にて横浜を出港。函館を目指す。途中、三陸沖大津波による犠牲者の遺体目撃。

7月29日午後5時

函館に入港。函館山に登山後帰船。

7月30日～8月2日

大連丸、小樽に入港。メイベル・村上は札幌に向かい、札幌農学校で新渡戸稲造に会う。さらに宮部金吾の案内で農学校の博物室を見学。

8月3日正午

貫効丸にて小樽を出港。

8月3日夕刻

貫効丸、増毛に寄港。メイベルは村上を伴いアイヌコタンを訪れる。その後利尻に寄港。

8月5日朝7時

貫効丸、枝幸入港

8月9日

枝幸での日食観測

村上の手記によれば、メイベルと京都で落ち合った7月中旬、大雨による影響で東海道線が不通となり、やむを得ず船便で横浜に向かったようだ。二人は大連丸が小樽に着いた後、札幌に向かい、当時札幌農学校教授を務めていた新渡戸稲造に会っている。さらに宮部金吾の案内で

札幌農学校の博物館を見学しており、後述するモースからの依頼によるアイヌ民具の収集の予備調査を行っていたのかもしれない。

メイペル一行の枝幸入港は8月5日。観測隊本隊に遅れること約一ヶ月の到着であった。ひと月ぶりの再会となったトッド夫妻は互いの無事を喜び合ったという。

訳文「北見の国・枝幸」

以下、『コロナとコロネット』第28章の「北見の国・枝幸」を訳出する。なお、本章は272頁から291頁までの19頁からなるが、この中で277頁の24行目から280頁3行目までは、観測機械の形態や性能について説明した箇所であり、枝幸村に関する描写は一切見られないため省略し、〈…中略…〉と表記した。

第28章

北見の国・枝幸

私は見知らぬ人びとの間を旅した
海を越えた土地で
ワーズワース「イングランド」より

太陽の子らよ！ 汝らに与えられた
自由の旗を守るために
ドレーク「アメリカの旗」より

ミカドの国の旅人たちが、大きな北の島、「エゾ」と聞いて思い浮かべることは、クマ、異国の民族・アイヌ、札幌農学校そして美しい函館の港くらいだろう。この港には、横浜港の夏の暑さから逃げ出した各国の船が集まってくる。

この島は、約37,000平方マイルの広さがある。そのほとんどが森林によって占められており、推定で1億2,900万本もの木々が生育している。森林は常緑樹が多いが、ミズナラやニレ、クルミ、シラカバ、カエデその他の北方種、見栄えのよいナナカマドやからまったツタを見ることが出来る。

1877年、ベンジャミン・スミス・ライマン^{*1}は、この島で初めての地質調査を試みている。

その結果、多くの興味深い事実が明らかとなった。そこにはいくつかの火山があり、多量の石炭を含む鉱脈が広がっていた。しかし、大まかに言って、北海道はまだあまり知られていない地域である。手つかずの自然と人間性がまだ残されている数少ない場所の一つだ。先住民たちは彼らの進む道を誰にも邪魔されていない。そして、広大な人跡未踏の原始林は、外の文明による最初の一步を待っている。たぶん、日食よりもこの辺境の荒野にイギリスやフランス、アメリカの科学者たちは、一度は引き寄せられるだろう。それは東京帝国大学の学者たちも同じだ。

朝のまぶしい日差しを浴びて、貫効丸は枝幸を目指し、北海道の北海岸に沿って先発隊を追いかけた。船を指揮する若い日本人は、一度もそこへ行ったことがないと言う。常緑樹、静かな山並み、灰色の屋根に覆われた村々が何の特徴もない海岸線に連なっている。

私は肝付海軍大佐^{*2}と一緒に甲板に立ち、双眼鏡で単調な光景が広がっているのを眺めていた。そのとき、私は星条旗を目にして、思いがけなく胸が高鳴り、涙が頬を伝うのを感じた。しばらくの間、胸がいっぱいになって彼に話しかけることもできなかった。村上さん^{*3}は、静かに陸の方を見つめていた。オホーツク海の波が打ち寄せ、サハリンから北海道へと吹き抜けるそよ風を受けながら、私は感動に身を震わせていた。

故郷を大切に思う気持ち、愛国心は、戦争の時だけでなく、思いがけず自然に生まれてくることもあるのだ。

枝幸の近くになって、船の左舷前方、約2マイルの距離をとって巨大な黒い巡洋艦「アルジェー号」^{*4}が見えてきた。この船は横浜からデランドル教授を乗せてきたところで、今は彼の日食観測が完了するのを待って港に停泊している。

星条旗だけでなく、星のないフランスの三色旗を見ても親しみを感じる。日本海からオホーツク海へと続く長い旅は楽しい気分うちに終えることができた。そして、(枝幸では)とても熱狂的に歓迎された。

枝幸の天候は、濃霧の立ちこめる地域からは明らかにはずれており、道南地方よりも大気は

ずっと澄んでいた。北海道の北部と西部をのぞき、日本のどの地域にも頻繁におこる地震もなく、すべての計画は楽観的に思えた。

7月10日から8月5日までのうち、10日間は快晴で、曇ったのは4日間だけだった。北海道の北のこの地域は、本州よりも晴れた日が多く、日食観測により良いチャンスを提供してくれそうだ。しかし、南の海岸線には絶えず霧が広がっていた。中央気象台の優れた小冊子が刊行される前、過去3年間のこの季節の観測記録を注意深く分析し、私たちは日食観測地点の選定に役立てた。その結果、枝幸が選ばれたのだ。その選択は私たちやフランスの観測隊だけでなく、東京の大学から送られた観測隊も同様だった。一方、リック天文台の観測隊^{*5}とイギリス観測隊^{*6}は、道東の厚岸を観測地として選んだ。従って、5つの観測隊が北海道を舞台に、日食の真実を突き止め、未知の栄光をつかむために待ち構えたのだった。

日本政府から北海道庁長官^{*7}、さらに市町村に対して、観測隊に便宜をはかるよう電信が送られ、私たちは地域にある全ての人材、資源を利用することができた。観測隊の護衛や通訳、英語の分かる電話交換手、さらに観測隊本部としてつい最近明け渡したばかりの小学校の校舎が用意され、観測機材と観測小屋を設置する広い土地もあった。そして、できる限りの手伝いをするために、聡明な住民たちがすべて集まった。

村長^{*8}の妻は小柄な女性でお歯黒をしていた。彼女は花瓶と花を持ってきて、観測基地の食堂を飾ってくれた。日食観測の記事を書くために枝幸に来ていた札幌の新聞記者^{*9}は、貝の化石と珍しい地質標本をお土産に持ってきた。

あるとき、観測機械に問題が発生し、観測隊員は応急修理のために地元の鍛冶屋と交渉をした。(交渉は難航したが)、最後には鍛冶屋の意見を受け入れた。詳しく言うと、彼らは一日で蝶番の部品をたった1個半しか修理することができなかったのだ。

寺尾教授^{*10}の率いる東京大学の観測隊は、日本政府の公式な観測隊だった。彼らは枝幸の市街から半マイルほど南下した、海岸線からやや離れた場所に観測基地を作った。日本隊は素晴らしい日食の写真を撮影するためによく準備していた。彼らの観測機材の中には特別に用意された口径8インチの写真撮

影用の機材もあった。これは有名な光学機器メーカー、ブラッシャー社のもので、日食観測専用設計されている。レンズのための最高品質のガラスがなかなか入手できないために遅れていたが、数日前にドイツから到着したものだ。

フランス観測隊は市街地の西のはずれに観測基地を置いた。そこは四角い開けた土地で、様々なテントや小屋が立っており、大きな観測機材や煉瓦の土台はそれだけで小さな集落のように見えた。彼らの装備もとても精巧で、もっぱら分光学的な観測のために設計されており、天文学的研究でことに名高い。彼らはパリ天文台での物理学的な研究や、日食時以外の太陽プロミネンスの撮影、1893年のセネガルでの日食観測によって発見した太陽コロナの自転などで大きな業績を上げている。

デランドル教授^{*11}は、パリから同行するよう前もって指名されていた紳士達から手助けされているだけでなく、アルジェー号の士官たちから貴重な協力を得ていた。艦長のブテ大佐、ル・ブルード・クルロン大尉(彼は6インチ望遠鏡の操作を担当しており、4人の連絡係を務めた)ユルバン大尉、デュマ少尉(彼らは光度計や熱電気機材の操作を担当していた)、彼らはアルジェー号から派遣された水兵たちによって補助されていた。そして、彼らの存在はこの静かな村に一騒動を巻き起こしたのだった。デランドル教授の装備はおそらく最も手が込んでおり、今回の日食観測のために必要な分光学的な機材が全てそろっていた。一方ではコロナの撮影に必要な機材もそろっていた。

〈…中略…〉

現場の天文学者にとって、この古い校舎よりも理想的な観測隊本部はない。長いメインルームは機械を設置したり調整したりするのに分けて使った。一段下には別に広い部屋があった。ここは衝立やカーテンによって仕切り、観測隊の隊員たちの寝場所になった。食堂と台所はコックと助手たちが使った。トッド博士のための大きな事務室の一角が背の高い屏風で仕切られ、寝具が備え付けられた。こうした設備はすべて一つ屋根の下に準備された。とても贅沢な

キャンプだった。実際、デランドル教授やブテ艦長がやって来て、食堂で対応すると、垂木にハムやベーコンが吊り下がった薄暗い物陰を背景に、彼らの上品な顔が浮かび上がった。それは非日常的な経験だった。

電報と郵便では全く正反対だ。前者は速くて信頼できるが、後者は確実だが稚内からの馬による輸送か、時折入港する汽船に頼っている（ので遅い）。トッド博士の机のそばの窓辺に私が座ると、外には物見高い人びとが集まってきた。古い校舎のその引き窓には木製の棧が取り付けられていた。子どもたちや若い女性、赤ちゃんを背負った母親や腰の曲がった老婆までも集まってきて、それは奇妙な光景だった。しかし、あまり小さい子供や下層階級の子供はいないようだった。彼らは集まってくるとかわいらしいお辞儀をして、優しげに「おはよう」と言った。そして、その無邪気な好奇心を満足させると行儀良くお辞儀をして、「さよなら」と言って別れた。たくさんの人びとにじっと見られたが、みな礼儀正しく育てられており、嫌な感じはしない。どうやら私は彼らの人気の的になったようだ。

この村の通りの一角では、朝のとても早い時間に魚を買うことができる。日常生活の中にもとてもおもしろい出来事もあった。ある朝、朝食の前に、フランスの水兵がフランス語と日本語、さらには時折、英単語も入り交じった訳の分からない言葉で、魚を買おうと試みた。お互いの理解力が欠けているので、彼らは次第にいら立ってきた。終いにはこの言葉の混乱が笑いを誘った。

校舎の引き窓から村人の生活を見ていると、女性たちが通りに出て洗濯をしていた。これは女性たちが世間話を楽しむ時間でもあるのだ。

きれいで風通しの良い茶店のななめ向かいには芸術的な街灯が立っていた。その店の縁側にはきれいな女性たちが座っており、客が出たり入ったりしている。そして夜になると通りには提灯が揺れていた。

この村の人々の多くは、サケやニシンのもたらす富によってこの辺鄙な海岸に引き寄せられてきた。多くは南の地域から移住し、10年を待たずに一つの村が生まれたのだ。一方で、日本

人達は新しい地域への入植を好まない。自然のもたらす春と秋の恵みだけが彼らをこの地にひきとどめているのだ。実際にこの季節だけ、枝幸の人口は1,700人から4,000人近くにまで一時的に増加する。

網元はとても裕福で、一人で30人から50人を雇っている。雇われた人々の中にはアイヌ民族もおり、網の仕掛けや水揚げといった労働に従事している。網元たちの暮らしは変化に富んでおり、冬の間は函館で過ごすことも多い。そして、時々商用で東京にも行っている。彼らの子ども達は良い学校や大学に通っており、住宅はとてもきれいで上品だ。

北海道のもたらす富の可能性が広く知られるにつれ、おそらく、今のような手つかずの状態はいつまでも続かないだろう。全ての日本人の入植者達は、まだ、未開拓の集落に住むアイヌ民族と十分な調和をもって暮らしているとは言えない。京都の「祇園祭り」では豪華な山車にくすんだ白い賽銭箱を抱えた人々が付き従っていた。（一方、枝幸では）乗り心地の悪い、揺れる車のようなもの^{*12}が造花の桜の間を練り歩いていた。（京都のお祭りをみてきた自分にとっては）このような取るに足りないものではとても感心できない。

そして、宗教的ではない催しが始まった。出店が立ち並び、芝居が演じられ、女相撲の対戦が始まった。

私の村での初めての散歩は、枝幸を訪れた最初の外国人女性である私にとっても、村民にとっても楽しい出来事になった。村長は村の主要な通りを案内してくれた。すると興味をもった大勢の村人が言葉もなく大勢ついてきた。しかし、最後には紺色の着物の裾をたくし上げた男の子が興奮して、先頭をゆく自分のそばに来て、おもちゃのトランペットを吹き始めた。彼は一生懸命吹き鳴らしたので、ついてくる人数はどんどん増えていった。この小さなボディガードは、通りの角ごとに大きな音を吹き鳴らし、多くの人々がこの自然にできた凱旋行進に加わった。ついてきた人々はほとんどが日本人だが、集団の外側にはアイヌ民族も少しいた。アイヌの人々の歩き方や顔の表情は、見てみない振りをしているようで、無関心に見える。彼らは決して

近づいて私を見ようとしな。 (アイヌの) 女性や子ども達は男性に謙虚に付き従っているが、本当は男達よりも堂々としている。(アイヌの男達は) 日本人よりも強そうで立派に見えるが、背は高くない。老いた男は長いひげを生やし、厚みのある髪を中分けして、絵に描かれた(キリスト教の) 使徒のように慈悲深く、尊大な表情を浮かべている。

夕方、(明治天皇の) 御真影を迎えるためにきれいな砂の敷き詰められた道にさしかかった。このような僻地の小さな村では、古くから皇室への深い敬意が保たれている。

ただ、枝幸というところは、真に絵のように美しい風景というわけではない。昨年11月の嵐で打ち上げられた地元の汽船、そしてまた、想定されている日食観測者が原始的というよりはましな生活を送るその近くの乱雑なテントといったものは画趣をそそりはするが、しかしその石川丸の姿は絵描きにとって何か物足りない。

散歩の後で、海岸近くの小さな神社に足を向けた。神社には美しい二つの鳥居があり、そのうち一つは見事な花崗岩でできている。境内はよく手入れされ、砂利が敷き詰められていた。神主を務める日本人はひげのない奇妙な外見をしており、無関心な表情をしていた。彼は神社の回りに並べられた盆栽の手入れに余念がない。同じ境内で、海岸の岩陰から不意に、約50フィートの高さのある小さな灯台が目に入った。ここでは毎晩、学生が忠実に明かりを灯している。てっぺんの狭い見張り台には外側にはしごがついており、私が8月9日の2分40秒の日食の間、コロナのかすかな射光をスケッチをするのに良い場所だ。(実は) 大切な計画の一つが実行不能になっていた。計画では副次的な観測基地を離れた丘に設けたいと考えていた。(ところが) この地域の全体が厚い原生林となっており、高さ6フィートから8フィートに達するササに覆われていた。村から他の集落へとつながっている道は、海岸に沿って作られており、電信設備を内陸にまで運ぶことはできない。輸送手段には十分な数の馬があったが、人力車も馬車も駕籠もなかった。(一方、) 北見海岸は乗馬に適しているように思えた。私は、観測隊員たちが観測機械の調整やテストに追われている間、村のそこかしこに馬で出かけた。

ある朝、私と枝幸の人たちが馬に乗って出かけるのと、その馬の子ども達がついてきた。子馬たちは1

マイルか2マイルほどついてきたが、やがて牧草を食べるために高台の湿地に戻っていった。私たちは、一日をアイヌのコタンで過ごし、枝幸に帰ってくると夕暮れに差しかかっていた。私たちは満ち潮で幅の狭くなった海岸線を急いだ。浜辺にはシギの群れが悲しげな鳴き声をあげ、飛んでいった。夜の帳が降りるころ、私たちは枝幸に帰り着き、村の街路の深い泥を跳ね上げていた。すると、私たちが見失った子馬たちが歓迎のいななきをあげながらついてきた。

道産子はそれ自体が書き記すに値する存在だ。たしかに見た目は良い馬とは思えないが、すぐれた性質を備えている。たいていの道産子は二つの歩き方ができる。一つは短くて早いトロットだ。これは急ぐ時の走り方で、もう一つがなめらかなギャロップだ。こちらは速く、しかも乗り心地がよい。アイヌ民族も日本人も乗馬に関しては、恐れを知らない有能な乗り手で、森の中の小道でも自在に駆け抜ける。すでに言及したが、ササはそこかしこに広範囲に広がっており、ハマナスがそれを彩っている。ハマナスの葉の豊かな緑はチェロキーローズに似ている。日に焼けたアカバナの背の高い穂状花序は、見覚えのある松明のように伸びていた。1本か2本のランが見え、さらに真っ赤なフレップやナス属の植物の紫色の群落が緑や黄色へと変わりゆく姿を見ることができた。そして、白いカミツレは、ニューイングランドのほこりっぽい道ばたを否応なく思い出させた。大きく、高く成長したマーガレットは砂質の土壌でもよく育ち、地面に「バターと卵」を敷き詰めたようだ。それはまるでゆらゆらと揺れる波のようにも見えた。

枝幸の山々は、常緑樹の中に落葉樹が少し混じっており、秋になると美しく彩られる。

長さ1インチを超える緑色の虻は、動きは遅いが、この村にたくさん生息している。また、この村の多くの屋根や棟木の上にたくさんのカラスが群がっていた。黒い翼の羽ばたきは大気に満ちている。ホーソーン^{*13}は、(カラスを) 黒い外見と地味な態度の(キリスト教の) 教義にそわない生きものであると描写している。なぜなら、カラスたちは疑いなく盗人であり、たぶん不信心者だ。しかし、北海道ではカラスは人間にいじめられることはないので、さらにずる賢くなっている。

アイヌの伝承では、遠い昔、魔物がカムイと争っていたころ、魔物は出来る限りカムイのあらゆる意図を打ち砕こうとしていた。人間たちは太陽の光と暖かさなしには生きてゆけない。魔物は夜明け前に起きて、太陽が昇るとすぐにそれを食べてしまおうと企んだ。しかし、カムイはカラスを遣わして、魔物を妨害した。太陽が昇った時、魔物は口を開けていた。しかし、カラスは太陽の代わりに魔物のものに飛び込んだ。だから、今でも太陽が輝き続けているのだ。それゆえ、人々はカラスに対して敬意を払っている。そして、カラスもそれを知っており、何でも自由にしている。カラスたちはかかしを怖がらないばかりか、その肩になれなれしくとまっている。

ある朝の6羽のカラスと黒猫の面白いお話しを紹介しよう。黒猫の片側にそれぞれカラスが3羽ずつおり、それらが単独で、交互に攻撃するのであった。猫がやり返すと、一番近くにいるカラスがどう猛に猫をつついて、列の端に飛んでいってしまうのであった。一方、猫が向きをかえて反対側の近くのカラスを攻撃するやいなや、次のカラスが飛び上がって、その遊びを続けるのであった。(猫は)常に負け、追い払われることとなるわけであるが、多くの敵がなぜ代わることなくどちら側かに居続けるということを理解するのに、この猫は頭を悩ますこととなったに違いない。この猫には尻尾があるが、日本の猫はそうでない。

早朝、それは屋根の上にいるカラスたちのやかましい足音によって起こされた時だったが、村の人びとが訪ねてきた。ノックの後に私たちの通訳をしてくれる大島さん^{*14}が入ってきて、さらに北海道庁長官の指示で札幌から派遣された有能な学生、教育委員会から派遣された役人、日本政府の役人、地元の有力者などが続いた。私たちは彼らに朝のコーヒーをすすめ、日本の人びとからはおもしろい化石やメノウなどの品々が贈られた。この交流はお互いに愉快な気持ちにさせてくれたのだった。

幸い、日本の「着物」はトイレの時はとても便利にできている。

私たちは彼らをトッド教授の事務室や観測隊の本部で対応した。周りの壁にはとても使いやすい棚があった。私たちはこの棚に、接眼レンズや電気機器、文献、ピカピカした真鍮製の容器に収まった対物レンズ、水準器、測量器械、写真用乾板その他の日食観測に必要なと思われるもの全てをしまっておいた。

朝食前の朝5時に行われたこの即興的な歓迎会で、村長は私たちの観測基地を見回して、長くて念入りなあいさつをした。あいさつには東洋の習慣であるお辞儀と微笑が十分に添えられていた。

実は、私たちが便利に使っていた棚は、以前は学校に通う子どもたちが靴箱に使っていたものだった。かつて、子どもたちの草鞋や下駄が占領してた場所に、今、素晴らしい観測機器が納められたことで、子どもたちの心に、壮大な天体ショーを見るために遙か遠方からやって来た著名人達を突き動かしている献身的な「科学する心」の一部でも芽生えることをトッド博士は期待していた。

枝幸の有力者である広谷さん^{*15}は海に面した風通しの良い家に住み、毎晩、数百の提灯で家を飾ってくれた。私が枝幸に到着した後のことだったが、彼は私たちを夕食に招待してくれた。彼のかわいらしい新妻はそっと後ろにひかえていた。彼女は灰色の絹でできた着物を着て、上等の布で作られた帯を締めていた。彼女は微笑みをうかべ、きれいな掛け軸や火鉢、青銅製の花瓶を背景にして、まるで絵のように美しく見えた。

日本の料理は様々な種類がある。そして、特にこの晩の料理は全ておいしく調理されていて、外国人の口にもあうものだった。ただし、私は珍味のひとつとされる黒い魚介類、ナマコだけはのぞきたい。しかし、他の日本人たちはこのナマコをよく食べている。肝付大佐、寺尾教授、私たちの通訳をしてくれる大島さん、その他大勢の人びとがそこにはいた。その中には多くのアイヌコタンを訪ねたことのある日本政府の役人^{*16}がいた。彼はアイヌ民族の様々な習慣…食事の仕方、来客との交流などについて、器用に真似をして私たちを楽しませた。彼はアイヌ語を話すばかりでなく、枝幸近郊の人びととの交流があった。そして、彼の厚意で、馬で行ける範囲のアイヌ民族の村々に連れて行ってくれることになった。これは、内気な彼らの心をどうやってつかむかという個人的な難問を解決してくれることになった。おそらく、アイヌ民具を収集したいというモース教授^{*17}から頼まれた課題の解決にもなるはずだ。

親切なご主人と提灯をもった彼の使用人たちが、私たちを宿舎となっている校舎まで案内してくれた。日食とアイヌ、望遠鏡とアツシ、馬に乗った遠出と新しい出会いの詰まった宝箱を想像し、打ち寄せる波の音を聞きながら、私は眠りについた。

訳注

※1.ベンジャミン・スミス・ライマン

ライマン (Lyman, Benjamin Smith 1835-1920) は、アメリカの地質学者。明治5年に北海道開拓使に招かれて、北海道の地質調査にあたった。夕張炭鉱の発見者として名高い。

※2.肝付海軍大佐

肝付兼行 (1853-1922)。当時、海軍水路部長の地位にあった。最終階級は海軍中將。後に男爵に叙せられ、貴族院議員、大阪市長を歴任。

※3.村上さん

村上春太郎 (1872-1947)。当時、名古屋中学校教授を務める。後に旧制第七高等学校教授を経て広島女子大学長。

※4.アルジェー号

フランス極東海軍分艦隊所属の巡洋艦。艦長はイポリット・エメ・ブテ大佐。フランス観測隊の要請を受け、横浜寄港中の同艦が支援にあたった。

※5.リック天文台

アメリカ、カリフォルニア州に所在する天文台であり、もう一つのアメリカ観測隊。

※6.イギリスの観測隊

グリニッジ天文台とオックスフォード大学との共同観測隊。

※7.北海道庁長官

北海道庁は内務省直轄の地方行政官庁。当時の長官は原保太郎。

※8.村長

枝幸地方では、明治24年に枝幸外三ヵ村戸長役場が置かれた。役場の所在地は現在の枝幸町。当時の戸長は白坂庫吉。

※9.札幌の新聞記者

日食観測を報道するため来村していた北海道毎日新聞社記者の朝永彝三。

※10.寺尾教授

寺尾寿 (1855-1923)。天文学者。当時、東京帝国大学理科大学教授で、東京大学附属天文台長を兼任していた。後に日本天文学会の初代会長を務める。

※11.デランドル教授

デランドル (Deslandres) はフランスの天文学者。パリ天文台に所属し、フランス観測隊の責任者として来村した。

※12.揺れる車のようなもの

祭礼の際に出店する屋台のことか。

※13.ホーソーン

ホーソーン (Hawson, Nathaniel 1804-1864) は、アメリカの小説家。代表作『緋文字』によって作家としての地位を築いた。

※14.大島さん

大島金太郎 (1871-1934)。農学者。当時、札幌農学校助教授。後に北海道帝国大学教授となり日本農芸化学学会の会長を務める。

※15.広谷さん

広谷季太郎。枝幸村の漁場経営者。後に北海道会議員を3期務めた。

※16.日本政府の役人

原文は「a gentleman formerly governor of a northern province」。当時来村していた拓殖務省北部局長の曾根静夫を指すものと思われる。

※17.モース教授

モース (Morse, Edward Sylvester 1838-1925) はアメリカの動物学者。大森貝塚を発見し、日本考古学の黎明を開いた。一方で、日本の民具の収集者としても知られ、そのコレクションはマサチューセッツ州セーラムのピーボディ博物館に収められている。

枝幸村に関する挿図について

今回訳出した第28章「北見の国、枝幸」には4枚の図版、写真が付されている。また、第28章以外の頁にも枝幸村に関する図版が挿入されており、必ずしも本文と図版が対応しているわけではないことが分かる。

本稿では枝幸村に関する図版・写真を再録し、紹介する。

1. 日食観測小屋



写真4. 日食観測小屋 (本文P. 10-P. 11)

写真の題名は「EXPEDITION HEADQUARTERS AT ESASHI, SHOWING PORTABLE HOUSE AND TWENTY TELESCOPES」。トッド隊の観測基地となった枝幸尋常小学校の旧校舎を背景に移動式の日食観測小屋が中央に写っている。小屋の入り口付近に立つ女性はメイベル。本文中の記述にあるように子どもたちが宿舎に来ていたようだ。

2. 日食観測後の記念写真



写真5. 日食観測後の記念写真 (本文P. 324-P. 325)

写真の題名は、「EXPEDITION MEMBERS, AND

SCHOOLHOUSE. AFTER THE ECLIPSE」と記されている。トッド隊の宿舎として提供された枝幸尋常小学校の旧校舎と観測隊員。メイベルは後列右から三人目の日傘をさした女性。右隣がトッド博士と考えられる。トッド隊7名に加え、子どもを含む日本人13名が写っている。後列右端の人物は白い制服を着用し、長剣を吊っていることから、肝付海軍大佐かもしれない。

図1は当時、観測隊宿舎に隣接していた広谷季太郎漁場の絵図。観測隊宿舎には日章旗と星条旗の双方が掲げられている (高崎, 1897)。



図1. 観測隊宿舎 (高崎, 1897)

3. 芸術的な街灯

この奇妙な形をした街灯は本文中にも記述がある。題名は、「FANCIFL LAMP-POST AND NATIVE INN AT ESASHI」。自然木の形をそのまま街灯に使ったようだ。背景の商店には「藤野回漕店」の看板が掲げられている。藤野回漕店は、現在の枝幸町幸町にあった。『北海立志編』によれば、創業者の藤野永



写真6. 街灯 (本文P. 282-P. 283)

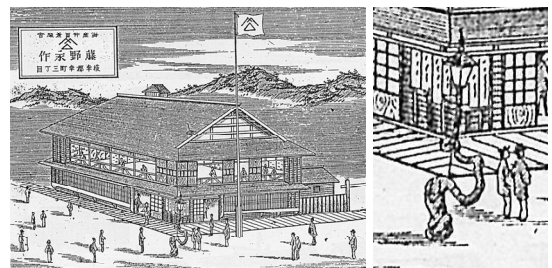


図2. 藤野旅人宿 (左) と街灯の拡大 (右) (高崎, 1897)

作は万延元年 (1860)、青森県南津軽郡の生まれ。明治25年に枝幸村に来村し回漕店と旅人宿を営んだ。明治27年には店舗を改築しており、メイベルが来村した時はまだ新築の建造物だ

ったようだ（高崎前掲）。同書には藤野の営んだ旅人宿の絵図が掲載されている（図2.）。

明治30年発行のこの文献にも藤野回漕店・旅人宿のシンボリックな存在として、この芸術的な街灯が描かれている。

4.村の大工



写真7. 村の大工（本文P. 280-P. 281）

写真の題名は、「JAPANESE CARPENTER MAKING PLATE-HOLDERS AT ECLIPSE STATION」。本文中にも観測小屋の設置にあたって村の鍛冶屋と交渉した経緯が綴られている。当時、枝幸村には複数の木材店や建築業者がいたが、具体的に特定することはできなかった。明治期の建築業の現場を伝える貴重な一枚である。

5.御真影の奉戴

原文は、「LANDING THE EMPEROR'S PORTRAIT AT ESASHI」。本文中には「夕方、御真影を迎えるためにきれいな砂の敷き詰められた道にさしかかっ



写真8. 御真影の奉戴（本文P. 238-P. 239）

た。このような僻地の小さな村では、古くから皇室への深い敬意が保たれている」と述べられている。

明治29年7月、枝幸村では市街中心部の栄町に3,000坪の学校敷地を設定し、5教室240坪の新校舎を建設した。7月7日には仮移転式を行い、日食観測終了後の8月11日にトッド博士ら日食関係者を一同に会し、盛大な落成式を執り行った（榎本編, 1971）。この際に御真影奉戴式を兼ねて挙げており、メイベルの見た御真影の枝幸上陸はこれに先立つものと推測される。写真右手はるか後方には汽船の姿が見え、御真影を運んできた小舟にはモーニングで正装した人物が確認できる。当時校長を務めた清水辰蔵かもしれない。御真影を迎える岸壁は文字通り黒山の人だかりとなっており、当時の雰囲気が良く伝ってくる。

6. 巖島神社の燈台

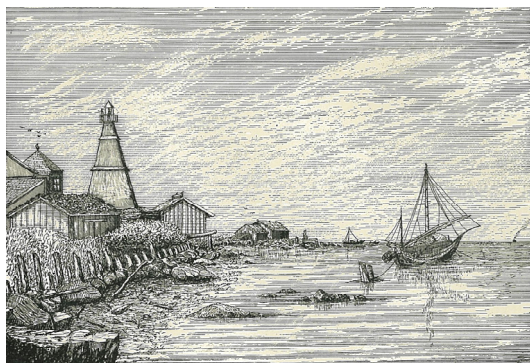


図3. 巖島神社の燈台（本文P. 322-P. 323）

写真題名は、「LIGHTHOUSE ON THE BEACH AT ESASHI」。明治29年当時、海岸線に接する南浜町通りにあった巖島神社の燈台を描いたスケッチ。

原文には「from a drawing by Mr. Thompson」とあり、このスケッチを描いたのはトッドに随行した技術者のフランク・トムソンと思われる。

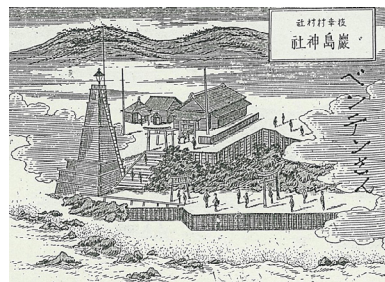


図4. 巖島神社（高崎, 1897）

枝幸の巖島神社は江戸後期の文化年間以降に

漁場請負人の藤野喜兵衛によって創建され、日食観測の前年にあたる明治28年に本殿・社殿を改築して、村社に列格した。図中に見える燈台は当時神社を守っていた柳本徳栄が尽力して建設したものである。前掲の『北海立志編』にも巖島神社に三層式の燈台が描かれている(図4.)。



写真9. 巖島神社明神鳥居

また、図4.には境内に小振りな鳥居が二つ描かれている。メイベルの記述にも「神社には美しい二つの鳥居があり、そのうち一つは見事な花崗岩でできている」とある。このうち花崗岩で作られた鳥居は天保4年に氏子たちによって奉納されたものである。藤野家の出身地である近江産の小松石を用いており、現在、枝幸町指定文化財として保護されている(写真9.)。

メイベルは8月9日の日食観測の瞬間をこの燈台の上で過ごした。そして、一面のガスに覆われた空を見上げ、彼女は失望のあまり身を震わせて泣き伏したと枝幸町史では伝えている(日塔編前掲)。

メイベルの記述から見た枝幸村の状況

メイベル・トッドの書き残した枝幸村に関する記述は、断片的ではあるが当時の状況を克明に伝えている。

共同体としての村落の形成期にあった当時の枝幸村では、漁業が経済的な基盤であったことがうかがえる。また、春のニシン漁と秋のサケ漁を中心とした季節的な漁場経営が行われており、漁期だけ人口が一時的に増加する状況が報告されている。メイベルによれば、1,700人の人口が実に4,000人近くにまで急増するとのことであり、労働力の多くが本州からの出稼ぎ労働者によって支えられていたことを示唆している。

30人から50人もの漁夫を雇い、子弟を良い学校に進学させ、冬期間は函館で過ごすという網元の裕福な暮らしぶりも記述の端々うかがえる。一方で、こうした網元も含めて枝幸村に定住し、年間を通じて生業にたずさわる人々は決

して多くはない。枝幸村の定住人口が増加し、枝幸市街地の形成が本格化するには、明治32年の枝幸砂金の発見を待たねばならない。

メイベルの記述は、枝幸村の経済的な側面ばかりでなく、人々の暮らしについても触れている。おそらく初めて外国人の女性に接したであろう枝幸村の人々は、好奇のまなざしで彼女を迎えたことだろう。一方で、彼女に接した人々の態度はみな礼儀正しく、メイベルは枝幸村の人々に対して好感を抱いたようだ。特にメイベルが村を散歩した際に、大勢の村人が集まって、「凱進行進」のようになったことを、彼女は「楽しい出来事」として記録している。

また、彼女が漁場経営者の広谷季太郎邸に招かれて夕食をともにした時の記述も興味深い。この時の会食にはメイベルの他に札幌農学校の大島金太郎、肝付兼行海軍大佐、東京大学の寺尾寿教授らが招かれている。献立の詳細は書かれていないが、ナマコを出されて閉口した様子が遠回りに記されている。メイベルの訪れた8月はナマコの漁期にあたり、冷蔵技術の発達していなかった当時では心づくしのご馳走だった。

日食観測の社会的背景

最後に明治29年当時の枝幸村での日食観測の社会的背景について考察したい。

当時の日食観測は、あくまで学術的な目的から実施されたものであるが、観測には各国の国力や国情が色濃く反映されている。フランス観測隊は、枝幸での日食観測にあたり、物資の輸送や人員の支援を同国の海軍に要請している。観測隊長ゼランドルは自国の文部省を通して、フランス極東艦隊司令官のド・ボーモン(de Beaumont)提督に依頼し、横浜入港中の極東艦隊分艦隊所属の巡洋艦アルジェーの応援を得ている(オホーツクミュージアムえさし所蔵文書資料, OME08-372-2: 日食観測に関するフランス科学アカデミー週報)。

アルジェーでは観測器機の輸送以外に、艦長のブテ(Boutet)大佐以下、ル・ブルール・ド・クルロン(Le Bouilleur de Courlon)大尉、ユルバン(Hurbin)大尉、デュマ(Dumas)少尉候補生が日食観測に協力している(オホーツクミュージアムえさし所蔵文書資料, OME08-372-1

：フランス海軍アルジェー号観測隊報告書）。アルジェーは観測隊のために週一度のペースで枝幸ー小樽間を往復していたとされ、こうした活発な動きが、「フランスの軍艦が海の測量をしている」という風聞につながった。当時、日本は日清戦争の勝利により清国から遼東半島を割譲されたが、1895年（明治28年）のドイツ・ロシア・フランスによる三国干渉によって、領有権を放棄せざるを得ない状況に追い込まれていた。日食観測が行われた明治29年当時、フランスに対する国民感情は決して良いものではなかったと言える。しかも、そのフランスの軍艦が日食観測を名目に北海道の港を頻繁に出入りしていることに日本海軍は神経を尖らせていた。

当時、海軍が肝付大佐を枝幸に派遣したのは、巡洋艦アルジェーの動きを警戒してのことであろう。肝付兼行は嘉永6年（1853）の生まれ。明治5年に海軍中尉として水路寮に出仕して後は、水路局測量課長、同図誌課長、測量長を歴任し、明治27年には水路部長に任命されている。枝幸での調査後は明治37年に海軍大学校長に就任し、翌年海軍中將を最終階級として退役している（財団法人海軍歴史保存会，1995）。

フランス観測隊への警戒心とは対照的に、アメリカのトッド隊に対しては、政府の好意的な姿勢が垣間見える。まず、メイベルが日本に到着後、名古屋中学校の村上春太郎が国内を案内している。さらに、札幌農学校の大島金太郎がトッド隊の通訳として派遣され、枝幸での滞在をともにしている。大島金太郎は、明治26年に札幌農学校を卒業し、研究生として農芸化学を学んだ後、明治28年に札幌農学校助教授に任命されたばかりであった（北海道大学，1981）。

メイベルが枝幸への途上、わざわざ札幌農学校に寄って新渡戸稲造に会っているのは、こうした支援への返礼の意があったのかもしれない。

また、メイベルと村上春太郎が汽船「貫効丸」に乗船して枝幸に来村しているが、村上の手記によれば、この船は観測隊のためにわざわざ用意されたものだった。貫効丸は日本郵船株式会社の持ち船で、総トン数は346.34トン。当時、枝幸ー小樽航路を結ぶ汽船としては最大の船だった（日塔編前掲）。

トッド隊への厚い協力体制は枝幸に到着して

からも変わることはなかった。メイベル自身が「日本政府から北海道庁長官、さらに市町村に対して、観測隊に便宜をはかるよう電信が送られ、私たちは地域にある全ての人材、資源を利用することができた」と記述しているように、枝幸村ではトッド隊に小学校の旧校舎を提供し、わざわざ西洋医学を学んだ医師を招聘して、不測の事態に備えたという。枝幸村にとってトッド隊の受け入れは、まさに村を挙げての一大事業であったと言える。

トッド隊の日食観測の背景には、当時の日本政府の全面的な支援が存在した。日食観測そのものは曇天により失敗に終わったものの、こうした好意的な雰囲気の中でメイベル、そしてトッド隊は枝幸村の人々との暖かな交流を育んだ。後にトッド博士の寄贈図書によって「北海道初の公立図書館」として開設した枝幸村の図書館は、この時の交流から誕生したものである。

おわりに

メイベル・トッドの旅行記は、さらに次章の「IN AINU LAND」へと続く。この章にはモースの依頼によって行ったアイヌ民具収集の経緯が綴られており、明治期のアイヌ民族資料の収集過程をたどる上で興味深い。今後も機会を設けて訳出を続けたいと考えている。

文頭に記したように、原文の日本語訳にあたっては、北海道大学大学院法学研究科法学政治学専攻博士課程のジョナサン・ブル氏に多大なご協力を頂いた。また、枝幸町立図書館には原書の入手について尽力をいただいた。ここに明記して感謝申し上げ、擱筆する。

参考文献

- 榎本守恵編，1971；枝幸町史・下巻．枝幸町
- J.D. エバウエイン編・鶴野ひろ子訳，2007；
- エミリ・ディキンソン事典．雄松堂出版
- 財団法人海軍歴史保存会，1995；日本海軍史9．
- 将官履歴（上）．第一法規出版株式会社
- 高崎龍太郎，1897；北海立志編48
- 日塔聡編，1967；枝幸町史・上巻．枝幸町
- 北海道大学編，1981；北大百年史・札幌農学校史料2．北海道大学